

8章 歴史と遺産における記念の役割：

第一次世界大戦従事者センターが受け継いだもの

担当：窪田 遥 (筑波大学大学院)

kubota.haruka.ss@alumni.tsukuba.ac.jp

著者



Nicola Gauld

the Voices of War & Peace Centre コーディネーター,
フリーランスキュレーター, アウトリーチプロジェクトワーカー
アバディーン大学で美術史を専攻, 2006年に博士号取得。

Children's Lives (Birmingham Museum & Art Gallery, 2011) といった展示やアウトリーチ活動を数々行っている。

主な著書：Nicola Gauld(2018) *Words and Deeds: Birmingham Suffragists and Suffragettes 1832-1918*, History West Midlands (<https://www.amazon.co.jp/Words-Deeds-Birmingham-Suffragists-Suffragettes-ebook/dp/B0B2Z17PF4>)

出典：<https://www.voicesofwarandpeace.org/about/> (最終閲覧日：2022.6.22)



Ian Grosvenor

バーミンガム大学教授, 都市教育史名誉教授

the Voices of War & Peace Centre 主任研究員

人種差別, 教育とアイデンティティ, 教育研究における視覚, 教育と物質文化, 都市教育史に関する多くの論文や著書がある。

主な論文：Grosvenor, I (2021) 'No power without image control: 'at school we learn to read, but we do not learn to look,' Totalitarismos europeos, propaganda y educación ed. Eulalia Colleldemont (Gijon: TREA), 11-21.

出典：<https://www.birmingham.ac.uk/staff/profiles/education/grosvenor-ian.aspx> (最終閲覧日：2022.6.22)

■重要な概念

Monumental history 記念碑的歴史

Critical history 批判的歴史

dominant narrative 支配的な物語 →マスターナラティブとの違いは？

■議題

①教育組織(本文では大学)と社会教育(公民館や博物館等のサークル活動, 地域コミュニティ)とどのように連携し, 「歴史教育」を展開するのか。

→社会教育の場で行われている「歴史教育」やパブリックヒストリーに向けて, 学校教育において子どもたちを備えさせるべきか否か。

②帝国主義を正当化しない, カウンターナラティブとしての歴史教育カリキュラムの実現は可能か。

■この章の流れ

まずイギリスの現状や「歴史的正義」の定義、第一次世界大戦エンゲージメントセンターの活動概要を述べ、次に2つのプロジェクトの考察 (*Stories of Omission* と “Justice Not Charity” Was Their Cry) を行い、結論を述べている

■イントロダクション (pp.153-154)

・5つの第一次世界大戦従事者センター

2014年にAHRCによって広範囲なコミュニティの参画活動を支援するために設立。

パブリックヒストリーとアカデミックを接続。各センターは大学とコンソーシアムを形成。

他のセンター：<https://nlha.org.uk/news/world-war-1-engagement-centres/>

章の目的 コミュニティ組織とアカデミーの協働の影響を考察する

方法 ケーススタディと the Voices of War and Peace Centre が2015年から2017年にかけて助成し、共同設計・制作した17の取り組みの評価

→とりわけ、第一次世界大戦の歴史の中で省かれている人種と障害の観点に取り組んだプロジェクトと、植民地主義の遺産を採求するプロジェクトに着目

17のプロジェクトで収集されたデータと、記念における多様性の問題に取り組んだ補足プロジェクトから集められたデータの調査を通して、

①プロジェクトがどのようにして紛争における植民地主義や帝国の遺産、障害者の権利に対する戦争の影響といった歴史的不正義に取り組んだのか

②異なる観点を示すためにどのようにして記念・記憶が異議申し立てをされてきたのか を考察する。

■記憶の彼方から歴史へ (pp.154-155) ☆イギリスの現状説明の節

・記憶することと忘却することは常に政治的な行為 (Rieff 2016)

・多文化主義への持続的な攻撃とともに伝統主義、外国人排斥、民衆ナショナリズムの台頭といった文脈の中で、イギリスの多様なコミュニティはこの6年間の記念する活動をどのように理解するのか？

■歴史的な過ちと歴史的正義 (pp.155-158)

・ニーチェの歴史の見方とイギリスにおける第一次世界大戦の支配的な物語には類似点がみられる

⇒ニーチェの批判的歴史は歴史的な過ちや不正義を是正するためのアクティビズムと接続できる

・歴史的な過ちや不正義の定義とは何か？

→歴史的正義は、声を封じられた人々に主体性を与えるべきである。

・近年、英国における黒人やアジア系の存在の歴史や、英国における帝国主義や植民地主義の影響といった研究によって、支配的、統一的、均質的で、連続的なブリテン島の物語と不変のアイデンティティに疑問が投げかけられている

→この仕事の多くは、地域のコミュニティセンター、成人教育の講座、図書館等で行われている調査活動といった地域活動によって推進されている。企画展、小規模な出版事業、口コミで広がってきた。
 ・一度認識された歴史は、周辺化された人々が表象に加わるために戦うことによって、再構築、再想像、再定義されうる

■第一次世界大戦エンゲージメントセンター (pp.158-161)

→社会から周辺化され忘れられた人々に「声」を与え、不正義を是正しようとする共同体のプロジェクト
 バーミンガム大学を中心に、主としてバーミンガム市内の公共図書館を拠点として他地域でも活動。

・ The Voices of War and Peace Engagement Centre の役割：

「子ども時代」「ジェンダー」「信仰」「記念」「平和と戦争」「都市」に関連する研究の専門性を主張
 英国宝くじの助成を受けたコミュニティ・グループを支援すること

・基金の助成プログラム（第一次世界大戦：今と昔）を通じて各コミュニティ・グループに資金提供

→しかし、最初の2、3年の間に多様なストーリーが生まれなかった

→そこで、黒人や少数民族といった社会の少数派や周縁化されたグループとのかかわり、隠れた物語や聞かれなかった/語られなかった声を明らかにしようとするプロジェクトを優先させた

→植民地主義や帝国に焦点をあてたもの（後で扱う2つのプロジェクト）や、難民の経験、女性の平和運動家といった軽視されがちな歴史について探究

・これらの協働活動の成果は、課題を上回ることが評価アンケートとインタビューで明らかに

成果の例：第一次世界大戦と現在の紛争を結びつける、スキルアップの機会の提供

But.大学の資金システム、タイムスケールの違い、若い人たちを学校教育と外部の教育機関の双方に参加させることといった課題は重大

・プロジェクトは AHRC が委託した2つの報告書（Creating Living Knowledge , Commom Cause Research）が明らかにした課題を反映していた

・エンゲージメントセンターの課題の1つ：

第一次世界大戦について受け入れられている一般的な知識（Ex.塹壕、西部戦線）に、異議申し立て（Ex.黒人やアジア系男性の歴史）をすること

But.物語を変えようという努力にも関わらず、黒人などと関係を持つ若者たちに歴史を関連付けることは困難であったし、より長期的な影響に対する理解を深めるまでには至らなかった

■省略された物語 (Stories of Omission) (pp.161-166)

→単に黒人男性の兵士としての物語ではなく、不平等や人種差別をめぐる問題とともに、戦争中とその直後のカリブ海での紛争の影響を扱ったプロジェクト

当時一般的に公開されていた紛争に関する情報に焦点化し、何が見逃され、隠され、無視され、軽視されたのか。そしてそのことが今日の英国における第一次世界大戦のナラティブにどのように影響を与えているのかにも焦点化

具体的には、Queen and Country(2007)に刺激を受け、A Canadian Gun-pit など視覚資料に注目し、『The Last Tommies』に登場するカリブ海出身の無名の兵士の画像も調査した。さらに、プロジェク

ト終了後もボランティアに研究を続けるように促した

But. プロジェクトで戦中・戦後の黒人兵士の経験を完全に理解するためには、まだ多くの仕事が残る
・ 第一次世界大戦中の黒人兵士の扱いは、しばしば無視され、報道から省かれ、その役割も否定され、戦後も黒人兵士に対する認識と認知の欠如がある

・ プログラムの下で資金提供を受けたプロジェクトの調査結果

1. 「第一次世界大戦：今と昔」というプログラムで資金提供された 2000 以上のプロジェクトのうち、BME (Black and minority ethnic) に焦点を当てたものはごく一部 (約 3%)

2. ウィンドラッシュ・スキャンダルの文脈においても、男性による紛争と犠牲という支配的な物語を強める傾向があり、反植民地主義や女性の物語が欠如

→しかし、記念の期間に行われた意識の高まりや努力は、不快な真実を伝え、過去と現在の双方の人種差別を認めるために、脱植民地化プロセスの不可欠な部分である

■ 「慈善事業ではなく正義を」それが彼らの叫び (“Justice Not Charity” Was Their Cry)

(pp. 166-170)

DHS (スコットランド障がい者史)：障がい者史の普及、教育、キャンペーンを通じて平等と多様性の向上を提唱することを目的に 2012 年にエディンバラで設立された団体

“Justice Not Charity” Was their cry は DHS とバーミンガム大学、初期キャリア研究者 (ECR) Jennifer Novotny による共同パートナーシッププロジェクト

・ プロジェクトの目的

1920 年にロンドンのトラファルガー広場で視覚障がい者連盟が組織した 200 人以上の行進デモが行われた際に、政治家が視覚障がい者の経済的・社会的権利を確保するのに役立つ法律 (報告者補足：1920 年にデモを受けて視覚障がい者法が成立) について下院で議論した出来事の認知度を高めること。

市民グループは、DHS などの支援を受けて、政治的・歴史的背景とスコットランドの行進者たちの個々の物語を探求した

→歴史の中で無視されてきた部分に注目させる、参加した個々人の物語を調査する。

「記念は選択的なものであって、私たちは大きな絵 (bigger picture) ではなく、断片的な絵 (fragmented picture) に目を向ける必要がある」

プロジェクトが直面した課題：資金、個人に関する情報や証拠が乏しいこと

■ 結論 (pp. 170-172)

・ 文化・メディア・スポーツ省特別委員会報告書 (2019.7)

“Lessons from the First World War Centenary”

→これまで「隠された、あるいはあまり知られていない物語」に言及しているが、なぜ隠されてきたのか

についての考察はない

Ex.インド人兵士の貢献に対する認識は高まっているが、英国黒人兵士、カリブ海諸国やアフリカからの兵士については報告書の中では言及されていない

→報告書は最後に今後の記念行事には多様性を明示的に含めるべきと提言している

・誰が話を聞いているのか？

本章で取り上げたプロジェクトはすべて、これまで十分に声を聞いてもらえなかった人に「声を与えた」ことは間違いない

But,その声を誰が聞くのか。この連携のプロセスから何を学ぶことができるのか。コミュニティ組織と大学のかかわりはどのような意味を持つのか。

・6年間で、第一次世界大戦従事者センターの活動が多様なコミュニティの研究能力を向上させ、個人、地域、世界的文脈における紛争の現代への共鳴と問題への理解を構築してきたことを実証

But.戦争に関する物語に挑戦するという AHRC などのねらいがどれほど難しいかは、2014年段階では明らかではなかった

物語 (narrative) を再定義することは今日の歴史的記憶の焦点としての国家とその現在の4つの構成要素の定義にどのような意味を持つのか？ (Bhambra et al. 2018)

・過去について受容された考え方が特に強い文脈において、参加型研究を通じて正義と教育の問題にとり組む包括的で多様な歴史的遺産を発展させるという課題

→学会からコミュニティとの関係を構築するスキルと能力を持つアカデミックと公共関与の専門家の関与を求め、時間と資源の投資を必要とする

⇒アカデミックこそ、西洋中心的な規範がいかに特定の形式の知識や教育法を正当化しているかを認識し、脱植民地化、帝国の遺産と暴力に立ち向かうことに積極的に取り組む必要がある